



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	中国語の可能補語
Author(s)	伊藤, さとみ
Citation	日本東洋文化論集(9): 1-16
Issue Date	2003-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2391
Rights	

中国語の可能補語

Potential Forms in Mandarin Chinese

伊 藤 さとみ

Abstract

Chinese has two forms to express potentiality: one is adding an auxiliary 'neng (can)' before the verb, the other is infixing 'de (get)' or 'bu (not)' in the verb. The former way of expressing potentiality is common among languages. The latter is rather unusual, since both 'de' and 'bu' are not potential morphemes. In this paper, I will show that a Chinese verb refers to an action in potential situations, and that this property of Chinese verbs explains why the infixing of 'de' and 'bu' can express potentiality.

1. はじめに
2. 先行研究
 - 2.1 「能／不能」との比較
 - 2.2 可能の意味の由来について
3. 可能の意味
4. 動詞の特性
 - 4.1 現象
 - 4.2 提案
5. 可能表現の成立
 - 5.1 可能補語の構造
 - 5.2 可能補語の成立
6. まとめ

1. はじめに

現代中国語では、動詞と結果補語／方向補語の間に「得」や「不」を挿入することにより、動作・行為の実現の可能／不可能を表すことができる。

- (1) 他听得懂汉语。
- (2) 他听不懂汉语。

この形式は、「V得C/V不C」形式とも呼ばれ、中国語学において最もよく研究されてきた構文の一つである。この形式の不可解な点は、どの部分が可能を表している、ということを確認に言えないところにある。「V得C」の場合は、「得」がもともと可能を表す助詞であって、ここに可能の意味があるとする研究者もいるが、¹⁾ 通時的にも、共時的にも、これを支持する積極的な証拠はなく、また、「V不C」の持つ可能の意味と統一的な説明ができないという問題がある。本稿では、中国語の動詞が持つ特性から、この形式の持つ可能の意味がどこに由来するかについて、一つの提案を行う。

なお、本稿では、「V得C/V不C」は、Cが結果補語または方向補語である場合を扱う。Cが「了」や「得」である場合は、原則として扱わない。²⁾

以下、2節ではこれまでの研究のうち主要なものを紹介する。3節では、可能とは何かを定義する。4節では、中国語の動詞の持つ、結果性の欠如という特性について説明し、5節では、動詞の特性からどのように可能補語のもつ可能の意味が派生されるかを明らかにする。

2. 先行研究

2. 1 「能/不能」との比較

共に可能の意味を表す表現であるため、従来、可能補語と助動詞「能」とを比較した研究は多い。本稿では、「能」と可能補語の違いについては論じないので、ここでは「能」と比較する中で明らかになった可能補語の特徴に重点を置いて紹介する。まず、従来の研究をまとめると、大きく分けて二つの流れにまとめられる。一つは、可能補語の持つ状態性の強さに注目したものであり、もう一つは、補語Cの役割の特異さに注目したものである。以下、この二つをそれぞれまとめて紹介する。

可能補語に状態を表す側面が強いことを観察したのは、杉村1979と小野1990

である。杉村1979では、「V得C」が状語や定語として用いられること(3)、程度補語の修飾を受けること(4)、把構文や被構文の述語になれないこと(5)、命令文に使えないこと(6)、連動文の第一述部にはなれないこと(7)が観察され、これらの特徴が形容詞にも共有されることから、可能補語は形容詞的であり、非完結的状态を表すと考えた。

- (3) 他心里说不出地高兴。
- (4) 水声又很听得出了。
- (5) *我把窗戸推得开。
- (6) *看得见！
- (7) *他看见我叫声“老李”。

小野1990では、「V得C」は動作に意図性がなく、対象にも直接影響を与えないようなとき、即ちVCの他動性が低いとき(8)に使われ、対象への働きかけが強いとき(9)には使われないことを観察している。低い他動性というものは、典型的に状態を表す動詞に見られるものであるから、小野1990の主張は杉村1979と軌を一にすると考えられる。

- (8) 黎明之前，满院子还是昏黑的，只隐约地看得见各家门窗的影子。
- (9) 这种新发明的杀虫剂，[能杀死/*杀得死]很多种害虫。

また、この二人の研究者は、「V得C」の持つ状態性の強さ／他動性の低さは、主従複文の主節に現れにくいという傾向をも説明すると主張した。杉村1979では、「V得C」は状態しか表さないのので、条件節がある時には、「V得C」よりも話者の論理的思考過程を反映しうる「能」が現れると述べている。小野1990では、条件節の存在が動作の意図性をより強くすることになり、動作の対象への働きかけも増すため、「V得C」よりも「能VC」がふさわしいと説明している。

- (10) 学汉语难不难？不太难，只要多听多说就一定 [能学好/**学得好]。

(1) 土冻得很硬。用铁锹的活，〔能挖动/*挖得动〕

しかし、状態性／低他動性による説明は、可能補語の肯定形にのみ当てはまり、否定形にはあまり当てはまらないと言う難点がある。³⁾

一方、補語の役割に注目した研究には、劉1980、李1996、張1998がある。まず、劉1980は、可能補語は「能」と同じく、「ある種の能力を備えている、または主観的条件がある動作の実現を許す」という意味と、「ある種の客観的条件を備えている、または客観的条件がある動作や変化の実現を許す」という意味を表すが、可能補語は「能」と違い、ある動作の実現よりは、その結果または方向の実現の可否を表していると述べている。李1996もこの主張をほぼ認め、さらに談話機能的な再解釈を試みた。つまり、「能」はVに焦点を置き、可能補語はC要素に焦点を置くとの見方を提案している。張1998の主張もこれとよく似ており、可能補語の意味的特徴は、Cの実現が特に取り上げられて、それが可能であるか不可能であるかと言うところに表現の焦点が絞られている点と、動作の結果が強調され、それが表現の中心である点にあると述べている。

以上、二つの観察のうち、肯定形にも否定形にも当てはまるという点では、後者の観察はそのまま受け入れることができる。しかし、前者の主張する、可能補語は状態を表すという主張も、それを一回性の出来事との対比で捉えているとすれば、正しい。一回きりで終わる動作を表していない点で、可能は状態とよく似ているからである。本稿では、状態性の高さ／他動性の低さを示すものとして提示された言語事実のうち、条件節の有無が可能補語の容認性に影響を与えている点に注目し、文がどのようなタイプの条件節を含んでいるか、或いは文意としてどのような条件節がほめかされているかにより、これまでに観察された現象が説明できることを示す。

2. 2 可能の意味の由来について

可能補語の持つ可能の意味がどこに由来するのかについて触れたものは、あまり多くはないが、大河内1980、Li & Thompson1981、張1998の三つがある。その中で、張1998を除く前2者は否定形式についての考察が主である。まず、

大河内1980では、可能補語において補語部分の表す動作・状態が無意志的なものであることを指摘し、これの否定は、「そのおのずからなるものを否定することによって、その動作行為全体の実現性を否定し、ひいては不可能を表明する」ことになると説明している。Li & Thompson1981は結果の否定から不可能の意味が推論されるとだけ述べている。しかし、実現性／結果の否定がなぜ不可能の意味になるのか、その推論の過程はまだ明らかではない。また、否定形式のみがその成立に理由があるのなら、「V不C」が成立してから、類推で「V得C」が作られたと考えるのが自然だが、そう考える根拠はないようである。

一方、張1998は、第3章で、可能表現の根底には、必ず有情物の意図性が存在し、それが実現できる場合は、「可能」の意味となり、実現できない場合は「不可能」の意味となると述べている。これは「可能」という言葉を単に「できる」で置き換えているに過ぎない面もあるが、可能表現の本質の一端を示唆するものである。特に日本語の分析をする中で、ある種の自動詞が、可能の標識を用いることなしに可能の意味を表す時には、「～ても」や「～れば」などの譲歩又は仮定を表す節が必ず想定しようという指摘をし、それら条件表現が動作主の意志性を明確にすることにより、可能の解釈が許されると考えている。ただし、張1998は意図性にこだわりすぎたため、次のような、認識的な意味を表す可能補語を、モダリティの性格を持つ可能として論から除外する結果となった。

(12) 別担心，水洒不出去。

本稿では、意図に限らず、動作主の想像した状況が可能の解釈に関わると考え、認識的な意味も他の可能と同じように説明する。そして、「V得／不C」という形式が可能を表すに至ったのは、中国語の動詞の意味に、動作主の想像した状況を含むという特性がある故であることを示す。

3. 可能の意味

ここでは、可能とはどういう意味かを考察する。これまでの研究では、「可

能」がどういう状態を表しているのか、きちんと定義されてこなかった。「動作主にある動作をする能力がある」、「主体的又は客体的条件によって実現することができる」などといった言い方は、よく見られるものであるが、これらはいずれも「可能」を「能力」や「できる」という表現で言い換えているだけであり、可能そのものの意味に迫るものではない。

まず、「ある動作・行為が可能である」と我々が言うとき、現実にその動作・行為が実現している必要はない。実現していない方がむしろ普通である。現実を反映しているのでないならば、一体何を念頭においてこのような発言をするのかを考えてみると、現実と条件や環境をほぼ同じとして世界を想像したときに、その行為・動作が実現していると思われたとき、「できる」と発話するとは言えないだろうか。このことをまとめると、「可能」を次のように定義することができる。

(13) ある動作・行為が可能であるとは、話者の想像した世界でその動作・行為が実現していること。

(但し、話者の想像した世界は、現実世界に基づいて想像したものでなければならず、現実世界からあまりかけ離れたものであってはならない。)

例えば、「私はこの論文を一ヶ月以内に書き終えることができる」という文を例に取ってみると、話者は、自分が現実に持つ能力及び自分が現に置かれている様々な条件に鑑みて、一ヶ月後に完成した論文を手に行っているところを心に想像し、こう発話したのである。この想像が得られなければ、それは不可能であるということに他ならない。ここで大事なことは、可能には二つの側面があると言うことである。一つは、話者が現実に基づいて想像するという面、もう一つはその世界で動作・行為が実現するという面である。この二つの段階を凝縮して表したのが、可能補語である。即ち、「V得／不C」において、Vは、その動作・行為を行っている世界を話者が想像していることを示し、そこにおいてCが実現する／しないということを表している。Vがなぜそのような働きをするのかについては、中国語独自の特性と関係している。次の節では、中国語

の動詞の特性について考察し、それらが現実の動作・行為を表す働きが弱いことが、可能補語を用いた可能表現を生み出していることを見る。

4. 動詞の特性

4. 1 現象

これまで、中国語の動詞の特性として、動作・行為の結果を必ずしも含意しないという特性があることはよく指摘されてきた (Tai1984、荒川1982、宮島1994)。例えば、Tai1984では、Vendler1967の動詞の四分類を中国語の動詞に適用できるかどうかを検証した中で、中国語には、単独で到達動詞や完成動詞として振る舞う動詞が少ないことを指摘した。例を挙げると、英語では到達動詞に分類される "kill" は、中国語においては動作動詞として振る舞う。

(14) 我看见了张三在杀季四。

(15) 张三杀了李四两次，李四都没死。⁵⁾

(14)は「杀」という動詞が進行形に現れうることを示しており、このことからこの動詞が到達動詞でも状態動詞でもないことが分かる。(15)では、「杀」がその動作の最終点（この場合、相手が死ぬこと）を必ずしも含意しないことを示しており、ここからこの動詞は完成動詞でもないことが分かる。従って、中国語においては「杀」という動詞は動作動詞に分類されることになる。

しかし、最終的結果を含意しない「殺す」とは、具体的にはどのような動作を指すのであろうか。直感的には、相手に「死ぬ」という結果が生じることこそが、「殺す」という動作を他の動作と区別しているものである。よって、もし「杀」という動詞が結果を含意していないのならば、例えば、「殴り殺す」と「殴る」という動詞の表す各動作の違いを表すことができなくなってしまう。

中国語の動詞が、具体的にはどのような動作を指しているのか、という問いに取り組んだ研究に宮島1994がある。宮島は次のような例を挙げ、ここで下線部の「买」という動詞が指している内容を明らかにすることを試みた。

(16) 古代、有个国王想用千金买一匹千里马。可是，买了三年没有买到。

宮島はまず、「买」という動詞の表す動作に対し、次のような八つの段階を仮定した。この八つの段階のうち、「买」という動作をしたと言える必要条件は1段階だけであると主張している。ただし、必要条件の他に基本条件というものがあり、6、7段階が「买」という動作をしたといえるための基本条件であると述べている。

- ①千里の馬のいる場所をさがす —— 「买」の必要条件
 - ②持ち主がわかる
 - ③持ち主の所へいく
 - ④値段その他の条件を交渉する
 - ⑤条件について合意が成立する
 - ⑥金をはらう
 - ⑦馬の所有権が変わる
 - ⑧馬をつれてかえる
- 「买」の基本条件
-

しかし、この分析では、「买」という動詞の表す意味が依然として曖昧である。必要条件を「买」の本来の意味ととれば、「探す」という意味の動詞と区別ができないということになり、直感的に納得がいかない。一方、基本条件をその本来の意味とすれば、「探す」等の動詞との区別はできるようになるが、(16)の「买」がなぜ基本条件を表さないのかを別に説明しないとイケない。

解明の手がかりとして、(15)や(16)の下線部を日本語に訳してみると、「殺そうとしたが...」、「買おうとしたが...」などになることが多い。そこで、中国語の動詞は、その動詞の表す動作・行為を（動作主が）意図していさえすればいいのではないかとも思われる。つまり、ある動作を「买」と言い表すことのできる条件には基本条件と必要条件の二つがあるが、基本条件は動作主の意図するところであり、必要条件は現実世界において実現されるべき最低の条件である

と考えるのである。だが、この説明も、次の下線部の「死」の用法を説明することはできない。

(17) 我已经死过几次了。我有没有给你讲过我在太行山十字岭战役死里逃生的事？

(17)の「死过几次」が表しているのは、当然死んでもおかしくないような状況に幾度も遭遇した、ということである。ここでは、死ぬことは動作主の意図したことではない。

4. 2 提案

前節より、中国語の裸動詞は、結果の実現を必ずしも含意しないが、これらを全て動作動詞であると見なすと、今度はそれぞれの動詞の意味を正しく捉えることができないという問題が生じ、また、意図性の概念を用いても説明できないことが明らかになった。この節では、この現象を捉えるための枠組みを提案する。

まず、動詞の表す動作を、いつも現実世界において考えることをやめてみる。現実世界ではなく、動作主の心の中、つまり動作主の想像した世界において考えてみるのである。すると、(15)のような例文では、張三が二回李四を殺すことを想像したことを表し、(16)の場合には、王様が3年間千里馬を買うことを想像し続けたこと、また(17)の場合にも、話者が何度も自分の死を想像したことを表すと言える。但し、すぐ分かるように、単に心の中で想像するだけでは不十分である。例えば、(15)が表しているのは、張三が李四に毒を飲ませたり、あるいは李四に向かって発砲するなどの行為をしたことを含意しており、決して張三が李四を殺すところをぼんやり夢想したことだけを表しているのではない。李四の死に至りうる行為をせず、ただ心の中で想像しただけであれば、「張三想杀李四」のように、「想」などの要素によって別に表される。以上の議論をもとに、中国語の動詞を過不足なく定義すると、次ようになる。

(18)中国語の動詞は、現実にな置かれている状況に鑑みて、その動詞の表す動作・行為が実現すると動作主が心に想像し、かつ、その実現に近づくような行為を動作主がしたことを表す。

この定義で、「その実現に近づくような行為」は、常識と文脈によって解釈が変わりうる。例えば「杀」であれば、常識的には、上に挙げたような実現に向けた具体的な行為を指すが、おとぎ話などで、呪いが効力を持つと信じられておれば、相手の死を心に願うことも「杀」の意味として通用しえるからである。また、動詞をこのように定義したが、普段の使用においては、動詞の表す動作・行為は絶えず何らかの要素により実現が確定される。例えば、語気助詞「了」は現実の発話時点における動詞の表す動作・行為の実現を表し、経験のアスペクト助詞「过」は現実の過去の一点における実現を表す。動作・行為の実現を表すのが主な役割ではないが、アスペクト助詞「了」や「着」、結果/方向補語なども、それぞれ文中のある参照点における動作の実現を含意する働きを帯びている。(18)の動詞の定義の下で、それぞれの要素の働きがどんなものか、明確にする必要があるが、その詳しい分析については別稿に譲る。

(18)の定義は、単独動詞の出現分布をよく説明する。動詞の単独使用は、未来の予定を述べたり(19)、人に命令したりするとき(20)、また埋め込み節(21)(22)などに見られる。これらは、その動作・行為がいつ実現したかを問わない文脈だとまとめることができる。⁹⁾

(19) 我去北京。

(20) 说！

(21) 本来老家来人应该高兴。

(22) 买衣服成了过年的一项大程序。

もう一つは、次のような文が不自然であることを説明する。

(23) ?我能看。

(24) ?他能抓。

この文が容認されるのは、回診などで医者が患者に「你能往右看吗?」、「你能抓吗?」と、それぞれ見ようとして眼球を動かす動作や、ものを掴もうとする動作ができるか否かを問うている場合である。ここでは、ものが見えることや掴んだ結果の状態などは含意されていない。この場合に見られる意味は、(例)で定義した動詞の意味をよく体現している。

5. 可能表現の成立

5. 1 可能補語の構造

従来、可能補語は、動詞と結果/方向補語の間に「得/不」が挿入されてできる、と言われてきたが、実際には、施1985が指摘したように、すべての結果/方向補語が「得/不」の挿入を許すというわけではなく、また、「得/不」なしには成り立たない「動詞+結果/方向補語」もある。

(25) a. 看得起---*看起

b. 信得过---*信过

(26) a. *提得起---提起

b. *进发得出来---进发出来

そこで、「得/不」は単に動詞と補語を繋げていると考えることにする。すると、今度は可能補語をとる動詞が常に一語からなり、なぜ複雑な形式ではないのはなぜだろうかという疑問が当然出てくる。

(27) a.*我抓好得住他。

b.*我抓好不住他。

(28) a.*我抓了得住他。

b.*我抓了不住他

可能補語を取る動詞は、それ自身が補語を伴ったり、アスペクト助詞を伴った

りすることができない。これは、補語やアスペクト助詞が、動詞の表す動作・行為を現実と関係づけてしまうからである。現実と関係づけられてしまった動作・行為では、話者の想像する世界を構成することができない。従って、(3)で定義した可能の意味を形成する一つ目の点、話者の想像する世界が得られないのである。

5. 2 可能補語の成立

単独の動詞が現実と関係づけられていないと言うことは、それ自体仮定の意味を含んでいると言うことである。従って、「V得C」は「VするならばCになる」、「V不C」は「VしてもCにならない」と言い替えることができる。⁷⁾ この言い換えが可能補語の根底にあることは、「V得C」と条件節の共起が時に難しいのはなぜかをよく説明する。つまり、「Aならば、Bならば、Cである」と条件節を二つ以上を重ねるのは、普通の言語使用において、許されないわけではないにしても、わかりやすい表現とは言えず、避けられる傾向にある。従って同じように、すでに条件節を意味的に持っている「V得C」も、条件節と共に用いるのは避けられる傾向にあるのである。だが、この「傾向」は話者によりばらつきがあることも知られている。例えば、(10)の例文の可能補語の言い方を問題なしとする話者も少なくない。これは、「たくさん聞き、たくさん話せば、そして勉強すれば」という条件の連続が不自然だと感じる話者はこれを容認せず、自然だと感じる話者は容認するという違いだと思われる。

(10) 学汉语难不难? 不太难, 只要多听多说就一定 [能学好/学得好]。

また、他動性の高さによって非文だと説明されていた例文も、言い換えた後の表現が自然かどうかと容認度がほぼ一致する。(9)に対し、(9)'は容認されるのだが、(9)を言い換えた「この新しい殺虫剤は、多くの害虫を殺そうとすればそれらは死ぬ」よりも、(9)'を言い換えた「この新しい殺虫剤は、どんな害虫も殺そうとすればそれらは全部死ぬ」の方が意味的に矛盾が少なく感じられる。この意味の違いが容認度の違いとして現れているのである。

(9) 这种新发明的杀虫剂, [能杀死/*杀得死] 很多种害虫。

(9') 这种新发明的杀虫剂, 什么害虫都 [能杀死/*杀得死]。

なお、(10)の可能補語を容認する話者でも、以下のような例文では、不自然さを指摘する結果が得られた。(29)はおそらく、「競走の時に」という限定と「走ったら速い」の仮定部分が重複し不自然さが生まれると考えられる。(30)も、「タクシーに乗ったら、帰ったら早い」というのは不自然である。

(29) 只要每天坚持跑一个小时, 比赛的时候, 你就 [能跑得很快/*跑得快。]

(30) 只有坐出租车才 [能早回来/*回来得早]。

さて、「V不C」の方は、「Vしても、Cにならない」と言い換えられるが、こちらの方は、譲歩節を伴って現れる場合が非常に多いことが指摘されている(大内田1976)。

(31) 就算他长上翅膀也飞不了。

これは、「Aしても、Bしても、Cにならない」というように、譲歩節の場合、二つ以上並列することが不自然でないからである。以上のように、「V得/不C」を仮定-帰結表現と捉えたと、条件節との共起制限が説明される。

ここで、3節(13)で定義した可能の意味を思い出すと、可能の意味には二つの側面、即ち話者が何か世界を想像することとそこで動作・行為が実現していることの二つが備わっていた。このうち、想像の世界をもたらずのに、「V得/不C」のVが役に立っていると考えられる。Vは話者がどのような世界を想像すべきかを指定する働きをする。つまり、話者の想像する世界は、現実世界と全く同じだが、Vの表す動作・行為が動作主によって行われている点のみが異なっているような世界だと定義される。一旦、この想像世界が得られると、そ

の中でC要素の表す状態が成り立つ／成り立たないが判断され、成り立てば可能に、成り立たなければ不可能となる。Cが実現しているかしていないかを判断すること自体は、我々が言語表現一般に対して常に行っている真偽判断に他ならないので、可能補語の持つ可能の意味は、単独のVに由来すると言える。「得」と「不」はVが単独のままであることを示しつつ、結果の状態を表すC要素と結びつける働きをしているのである。

6. まとめ

以上、本稿では、中国語の可能補語を取り上げ、その可能の意味がどのようにして生まれるかを説明した。主張をまとめると、可能補語の持つ可能の意味は、単独の動詞の性質に帰すことができ、動詞がその性質を保ったまま、結果の状態を表す要素と結びつくとき、可能の意味の定義を満たすことになるということである。

また、この説明は、中国語と同じ動詞の特性を持つ言語にしか、この形式による可能の意味が表せないことを予測し、なぜ可能補語のような形式を持つ言語が少ないのかも説明することができ、一つの言語類型論的法則の存在も示唆するものである。

<注>

1) 岳1984は、歴史的に見て、可能補語の「得」は、もともと動詞の前にあって可能を表していた助動詞に遡ると考えている。だが、この説に対しては異論があり、本来「獲得する」という意味の動詞が、他の動詞と結びついて可能補語となったとも言われる(楊1989、李1985)。

2) 即ち、劉1980の分類に於けるA類可能補語である。

3) 小野1991は、否定形において、VCの他動性の高低に関わりなく可能補語が使われるのは、動作の実現を否定することによって、VCの他動性が常に低くなるためであると説明している。

4) 進行形になれる動詞類として動作動詞と完成動詞があり、なれない動詞類に状態動詞と到達動詞がある。さらに、動作の最終点が含まれている動詞類が完成動詞と到達動詞であり、最終的が含まれていない動詞類が動作動詞と状態動詞である。このように、進行形になれるかどうかと、動作の最終点が含まれているかどうかの二つの基準で四つの動詞類が得られる。

5) (15)、(16)、(17)の例文は、修辞学的観点から作られており、必ずしも中国語の典型的な文とは言えないとの意見を述べたインフォーマントもいたが、他の言語ではこのような「修辞法」が成立しない以上、やはり中国語自体がこういった表現を許す要素を備えていると考えるべきである。

6) ただし、動作が繰り返し行われていること、またはその動作の表す状態が続いていることを表す場合にも動詞が単独で使われる。

但老家仍是源源不断来人，来了起码吃你一顿饭。

吃了一块哈密瓜，孩子更加活泼，跳到地上拉着小林的手玩。

この場合も、一つの行為・動作が、どの特定の時間に起こったかと言うことが問えないという点では、埋め込み節や命令文と共通している。

7) よく似た指摘に張威1998、51がある。が、本稿は可能の意味は仮定とその帰結の結合に由来すると考えており、定義の中に可能／不可能という言葉は用いていない点が異なっている。

<参考文献>

Li, Charles N. and Sandra A. Thompson 1981 Mandarin Chinese.
Berkley : University of California Press.

Vendler, Zeno 1967 Linguistics in Philosophy. New York: Cornell University Press.

荒川清秀1982「中国語動詞に見られる幾つかのカテゴリー」、『愛知大学文学論叢』67輯、344-369頁。

大内田三郎1976「中国語の可能補語について」、『中国語学』第226号、48-58頁。

大河内康憲1980「中国語の可能表現」、『日本語教育』第41号、61-73頁。

小野秀樹1990「中国語の可能表現」、『中国語学』第237号、93-100頁。

小野秀樹1991「中国語の可能表現の否定」、『中国語学』第238号、11-19頁。

杉村博文1979「能学好，学得好，能学得好」、『日本語と中国語の対照研究』第4号、16-37頁。

張威1998『結果可能表現の研究』。東京：くろしお出版。

李锦姬1996「两种可能式的语用分析」、『南京师大学报(社会科学版)』第3期、132-138頁。

李晓琪1985「关于能性补语式中的语素‘得’」、『语文研究』第4期、11-18頁。

刘月华1980「可能补语用法的研究」、『中国语文』第4期。

施关金1985「关于助词‘得’的几个问题」、『语法研究和探索(三)』，北京：北京大学出版社、247-279頁。

杨平1989「‘动词+得+宾语’结构的产生和发展」、『中国语文』第2期、126-136頁。

岳俊发1984「‘得’字句的产生和演变」、『语言研究』第2期、10-30頁。